

# 「日本篆刻の歴史」の和文英訳

—— 篆刻に関する和文英訳の課題と展望 ——

神 野 雄 二

## An English translation of “Nihon Tenkoku-no Rekishi” : Problems and prospects of translating the history of *Tenkoku* (seal-engraving) into English

JINNO Yuji

(Received by October 31, 2018)

### 1. はじめに

現在、日本の書道や篆刻が、国際的に正確に理解されているとは言いがたい。その要因は、歴史や技法が翻訳された資料・文献があまりに乏しいからである。本稿では、「日本篆刻の歴史」<sup>1)</sup>、江戸以降現代にいたる歴史を和文英訳し、英語圏の篆刻研究に資したく思う。また篆刻に関する和文英訳の課題と展望について言及したい。原文は、筆者がかつて、日本語で執筆したものに加筆修正したものである<sup>2)</sup>。

### 2. 日本の印史—近世（江戸時代）以降—（日文）

#### (1) 近世（江戸時代）

①江戸時代は幕藩体制が確立し経済や文化が普及し独自の発展を遂げた。和様書は前代から受け継がれ、御家流が公用書体として採用され浸透していた。また幕府による儒学の奨励策を背景に儒者・文人たちの間で唐様書が盛行し、両者が共存していた。黄檗僧や明の遺臣たちの来朝帰化による中国文化の影響とも相俟って、江

戸の文人趣味は隆盛した。江戸後期は中国で起こった清朝考証学の影響を受け金石研究の学問も開花した。江戸時代は多様な書論が現れたが、細井広沢の『観鷺百譚』、市川米庵の『米庵墨談』、貝原益軒の『和俗童子訓』などがあり、書論の研究の進展が見られる。

②江戸初期の篆刻は、室町時代の遺風が引き続き行われた。 儒者藤原惺窩の「惺窩之印」「北肉山人」や、林羅山の「羅山」「白雲齋」などの私印は、前代の形式を踏襲したものである。また徳川家康が用いた「福德」「源家康忠恕」や伝馬印は、戦国武将印の様式に則ったものであるが、儒教の徳目を用いた点に特色がある。「源家康忠恕」は「異国渡海朱印状」という特別な許可証に対して使用された。ただ石川丈山の「石凹」「六六山洞凹凸窠夫」「頑仙子」は、明末の装飾趣味を示しており、新生面を切り開いたものといえる。

書画印においては、桃山から江戸初期に出現した寛永の三筆の一人である本阿弥光悦(1558～1637)は、天才的な工芸家であり、刀剣・蒔絵・陶器に一家をなした。その方印「光悦」は斬新な風格を備えている。同じく画家俵屋宗達の円印「対青軒」「伊年」や、尾形光琳の円印「光琳」「方祝」「潤色」は、日本的で意匠の豊かなものである。この様式は後の琳派の画人達の好むところとなった。

③わが国において、印章を鑑賞するようになったのは、江戸初期に古書画の落款印章が図譜の形式で刊行されてからである。 最も初期のものとして寛永20年(1643)に『君台観左右帳記事』(墨書外題、唐みんづくし)が刊行されている。更に正保四年(1647)に『和漢歴代画師名印瀉図』が、承応元年(1652)に『君台官印』が刊行された。これらの書画印の刊本は書画の鑑定に用いられたものであり、書画の落款印章を作る参考にされた。ただ木版刷りの粗悪なものであり、鑑賞に堪えうものでない。幕末には鑑定の便宜に備えた印譜が刊行された。

④明王朝が1644年に滅亡するに及び、中国から日本に亡命して帰化する人々が多くいた。長崎を門戸として中国の新しい文化がわが国にもたらされ、それにとなって黄檗僧により篆刻が伝えられた。 戴笠(1596～1672)は、承応二年(1653)に日本に来航し、翌年渡来した隠元につき得度した。名を性易、字を独立、天外一間人と改めた。彼の自刻の印は見られないが、書に用いられた「惕芟」「遺世独立」「天外一間人」から六書の学に通じ、篆刻に深い素養を持っていたことがうかがえる。その他来航した禅僧に黙子如定・蘭谷・心越などがいる。心越(1639～1695)は、延宝五年(1677)に渡来した。はじめ長崎の興福寺に住し、その後江戸に出て、徳川光圀の招きにより水戸の祇園寺に入り、開山第一世となった。篆刻を巧みにしたが、その刻風は明末清初の今体派に属するものである。かれは詩文書画を善くし、弾琴に長じ、琴譜を存している。祇園寺にその遺作が伝えられている。彼は陳策の『韻府古篆彙選』を将来した。独立・心越は、近代篆刻の始祖と見なされている。

元禄から享保にかけて、心越に刀法を受けたとされる榊原篁洲（1655～1706）が現れた。わが国最初の鈴印自刻印譜『印纂』を作ったといわれている。彼に篆刻に関する先覚的な著述である『正統印章備考』がある。篁洲と親交のあった今井順斎も篆刻を嗜んだ。また細井広沢（1658～1735）は、学問を好み、江戸時代を風靡した唐様の基礎を確立した。篁洲・順斎・一峯らと交遊し、ともに篆学を講述し、刀技を修め、江戸を中心として一派を形成し、わが国の篆刻が勃興する機運を作った。池永一峰（1665～1737）は榊原篁洲の門に入り篆刻を善くした。正徳三年（1713）ころ『一刀万象』三巻を著し、一世に喧伝された。篁洲・順斎・広沢・一峰等は、長崎からもたらされた明末清初の今体の刻風である。江戸を中心として大きい勢力を形成したこれらの印人を「初期江戸派」と呼ぶ。初期江戸派の名家たちにより広められた篆刻趣味は、門弟たちにより世の中に伝えられ栄えた。広沢の門下である三井親和や永井昌玄らは初期江戸派に属する印人である。

⑤また初期江戸派にややおくれ、浪華の方面でも明末清初に流行した方篆雑体を特色とする篆刻の風が行われた。新興蒙所（1687～1755）が浪華に出現し、この地の書風は一変する。佚山・里東白・都賀庭鐘は蒙所の門下であり、これらの印人を「初期浪華派」と呼ぶ。

⑥江戸時代の長崎は、中国文化移入の門戸として重要な地である。この時代の印人は長崎と何らかの関係をもっている。その第一に挙げられるのが、源伯民（1712～1793）である。長崎の唐人から刀法を受けた滕永孚、彼に学んだ田中良庵、そして趙陶斎も長崎出身である。これらの印人を「長崎派」と呼ぶ。

江戸・浪華で今体派の篆刻が流行したように、京都においても広く行われた。殿亞岱・憎悟心・終南・林煥章・柳里恭等が活躍した。京都に現れた印人は、古体派と交流を持った者もいるが、多くは今体派に属するものである。日本の篆刻を考えるにあたり、これまであまり高く評価されることのなかった「近体派」はもっと着目されてよいだろう。「近体派」は、装飾的で俗悪な刻風であるというのが従来の評価だが、華麗な刻風の中に日本的な「雅」にして繊細な美を見出せる。

⑦江戸中期になると、印聖と称された高芙蓉（1722～1784）が出る<sup>3)</sup>。芙蓉は学識に優れ、書画篆刻を善くし、画は山水を巧みに描いた。篆刻は彼の最も得意とする所であり、当時流行していた明末清初の低俗な方篆雑体を退けて、秦漢時代の古印を尊び復古を提唱した。ただ、当時は秦漢印の実物が見られることは少なく『漢晋印章図譜』『顧氏集古印譜』『秦漢印統』『蘇氏印略』などを鑑賞していたにすぎない。しかし芙蓉は、限られた古銅印から韻致をくみとり、高雅な刻風を創出した。これにより今体派は一掃され、古体派が打ち立てられた。彼の印譜に『芙蓉軒私印譜』がある。さらに芙蓉は鑑識に精しく、著述に『漢篆千字文』や、『古今公私印記』の模刻がある。彼は当時著名であった文人や学者と交際したが、中でも柴野栗

山・韓天寿・池大雅・木村巽齋等とは特に親密であった。

高芙蓉の復古的な刻風は、その門下の印人により広く流布された。逸材は京都・大阪・江戸の方面に出た。さらに地方にも彼の印風は波及し、明治の初めに至るまで芙蓉派は栄えた。曾之唯（1738～1797）は「芙蓉の影子」と称され、師の風韻をよく伝えた。また印学に精しく『印語纂』『印籍考』を著した。芙蓉の代表的な門系を掲げてみる。池大雅・源惟良・葛子琴・前川虚舟・木村巽齋・初世浜村蔵六・稲毛屋山・杜俊民・余延年など一々枚挙するに遑のないほどである。紀止も篆刻を善くし、中でも細刻に長じ芙蓉の称賛を受けた。

⑧篆刻において最も重要な事は、篆文に対する知識があるかどうかということである。初期江戸派以後、明末清初の卑俗な装飾趣味に陥った篆刻の風は、篆文の字典や篆刻の専門書が刊行されたことにより、正しい方向づけがなされていく。肥後の村井琴山の『篤古印式』は印式の研究書である。美濃の二村椽山は『十二刀法詳説』を著し印刀法や鑄法を解説した。秦漢の古印への目覚めにより印学が勃興し、高芙蓉一派の尚古主義により、秦漢の古印を宗とする古体の風が興るのである。古体派の理論は、かれの門下である杜澂の著した『徵古印要』に論じられている。それは秦漢魏晋の印を古体とし印の正制とする。そして唐宋以下を今体とし印の偽制とする。さらに明代の変制を承けた初期江戸派以来の弊風を是正すべきことを説き古体派の理論づけをした。

日本の古印の研究書として、編集印譜に、穂井田忠友の『埋麝発香』、藤貞幹の『藤貞幹模古印譜』がある。

水戸は心越以来、篆刻に縁の深い土地柄であり、文化・文政年間に立原杏所が現れた。また林十江は画をよくし篆刻に優れた。杏所は今体派の名手であり、十江は古印に法を取った。

文人学者の間においても、文化・文政のころから頻繁に書画会が催され、篆刻を嗜むことは、彼らにとって教養そして趣味の一つとなった。頼春水や頼山陽など頼家の人たち・篠崎小竹・青木木米・田辺玄々・貫名海屋などは文人趣味の横溢した風雅な刻風の作を残している。玄々の『玄々盗印譜』は盗印譜として名高い。

江戸末期になると、芙蓉派の末流が、単に古体派の風を承け継ぐばかりでなく、新しい要素をつけ加えた独得な一派を形成するものが現れた。細川林谷（1782～1842）は妍麗な刻風で知られ、江戸を中心として各地に広がった。また二世浜村蔵六は深く古印の法を探り、創意を加え一家をなした。また益田勤斎（1764～1833）は、初期江戸派の流れを汲みつつ新意を出し近代性を加えた。その養嗣子遇所も家業を継ぎ、益田一家の一派を「浄碧居派」と呼ぶ。「浄碧居派」の刻風は精緻なもので、次の明治時代へ受け継がれていく。

⑨また江戸時代は、印判が普及し、幕府や武士の間における公式の生活において

使用されただけでなく、一般大衆の生活において「はん」が広く普及し日常頻繁に使用された。公文書・私文書に私印が使用され、商業の上でも欠くべからざるものであった。現代における印の使用は、江戸時代にその由来が見られ、現在における私達のハンコ社会と密接な関係を持っている。

## (2) 近・現代（明治時代以降）

⑩江戸時代の後半、篆刻界を風靡していた高芙蓉門流の古体派も、明治になると次第に衰微してきたが、その作風は依然として受け継がれていた。京都の中村水竹は、安政三年勅命を承けて「御府之印」を刻し、慶応3年明治天皇の御璽を刻し、ついで「大日本国璽」を刻した。かれは明治元年印司に任ぜられ、明治政府は官印の制度を復興した。また京都に安部井樸堂がおり、やはり同年印司を拝命した。明治七年小曾根乾堂の後を継ぎ、御璽・国璽の金印を完成した。細川林谷の門から羽倉可亭が出、宮家の印を多く刻している。以上の人達を明治の保守派と呼ぶ。

浜村蔵六（三世）・益田遇所に学んで中井敬所（1831～1909）が現れた。篆刻は初め明代の蘇嘯民に仿い、次いで上は漢魏六朝に遡ると共に、下は明清諸家の篆法の長所を取り入れ、整齊な刻風で一家をなした。また高邁な学識により、印学全般、金石書画の鑑定に従い、『印譜考略正統』『日本印人伝』『皇朝印典』『日本古印大成』などの稿本を纏め上げた。敬所は精緻な刻技による篆刻とともに、近代の印章学の基礎を作ったところに功績がある。彼は明治39年（1906）、篆刻家として初めて皇室技芸員に選ばれている。門人に田口逸所・岡村梅軒・岡本椿所・郡司樸所・河田文所らがいる。

⑪明治元年（1868）5月15日、印章制度が復活されたが『太政類典』にその規定がある。これは『公式令』の規定に基づいたものである。これにより御璽・国璽・府藩県の各印鑑・各省印が製作された。私印については、明治6年（1873）7月5日の布告により、同年10月1日以後は人民相互の証書に実印を用いることが課せられることとなった。ここで公私の別なく日常生活において一般に自署捺印が必要となった。

⑫明治から大正にかけての篆刻界は、先に述べた旧来の刻風を墨守する保守派と、中国の新風を取り入れ革新的な印を刻す新派に二分される。保守派に属す人に安部井樸堂・羽倉可亭・浜村蔵六（四世）・中井敬所・山田寒山がいる。山田寒山（1856～1918）は、芙蓉の古体の特色をよく守り、朴訥とした刻風を示している。寒山は多芸多才で、詩・書・画・篆刻・陶芸すべてを善くした。詩は寒山詩の遺響とも言うべきものであり、書は雅味があふれ、画は墨竹が有名である。蘇州寒山寺の住職となり、その復興と夜半鐘の新鑄に献身した。また荃廬・五世蔵六・初世蘭台・椿

所と丁未印社を結成したり、『印章備正』を刊行したり、豊富な話題を残し、明治・大正の印界における特異な存在であった。

新派は、先駆的な業績を残した人として精緻な刀風を確立した小曾根乾堂、浙派の刻風を慕い、わが国にそれを移入した篠田芥津がいる。また初め高田緑雲に修学したが、中年徐三庚の流麗な作風を追求し、ついで秦漢古印から浙派の技法を取り入れ、華麗多彩な刻風で知られる中村蘭台（初世）（1856～1915）がいる。彼は木印を得意とし鈕や木額、諸器物などの工芸的な作品を創作し、篆刻工芸に功績を残した。河井荃廬（1871～1945）は、篠田芥津に篆刻を学んだが、後渡清し呉昌碩に傾倒した。その後、幾度も渡清して中国文物の舶載につとめ、わが国の篆刻界に新風を注入した。また金石学・文字学・中国書画の鑑識に精しく、林泰輔に資料提供した『亀甲獣骨文字』は名著といえる。『書苑』『支那南画大成』『支那墨蹟大成』などは彼の監修になる。

他に桑名鉄城・浜村蔵六（五世）らがあり、中国に渡航し新しい篆刻の風を取り入れ、当時の中国印人の洗礼を受けた。大正から昭和にかけてはさらに、多くの印人が輩出した。古印の蒐集研究に従事し、諸家の長をとり入れて堅実な刻風の園田湖城がいる。

⑬山田正平（1899～1962）は、弱年山田寒山に従って篆刻を学び、後その養嗣子となった。中国に遊学し呉昌碩・徐星州から画と篆刻を学んだ。同郷の会津八一を欽慕し、小川芋銭の影響を受けた。感興を重んじ豪放雄偉な芸境を開いた。中村蘭台（二世）（1892～1969）は木印を得意としたが、刻風は装飾的で流媚である。石井雙石は東方書道会に属し、長思印会を主宰し『雕蟲』を発行し後進の指導に尽くした。刻風は奔放で自在である。松丸東魚は独学で秦漢古璽印を研究し、古格ある表現に徹した。保多孝三は洒脱な刻風で知られ、書画にも感性豊かな妙味を示した。この時代は日本篆刻史上一つの黄金期ともいえる時代である。

わが国における明治以降の中国古印の鑑蔵は特筆できる。明治の初年までは秦漢の古印は殆ど知られていなかった。ただ僅かに明人の作った印譜から、その面影を窺っていたにすぎなかった。明治13年楊守敬が来朝した折、古印を伝えたのが、わが国に伝わった最初である。その頃の鑑賞家・蒐集家に男爵郷純造がいる。

さて日本に古印が多く舶載されるようになったのは、辛亥革命（1912年）以後である。当時中国の古文物を蒐集購得する人々が輩出して、中でも京都の大谷登誠（禿菴）、藤井善助（静堂）、園田穆（湖城）、盛岡の太田孝太郎（夢庵）、東京の中村鉾太郎（不折）、大阪の上野理一（有竹）、讃岐の大西行禮（見山）、神戸の中村準策（依水）などは古印の蒐集とともに印譜も刊行した。

古銅印譜は太田夢庵、園田湖城が最も系統的に蒐集して、太田夢庵の膨大な蒐集の三分の二は横田実（漠南）が襲蔵した。また園田湖城のコレクションの大半も横

田実が入手し、その後、太田・園田コレクションのほぼ三分の一は小林斗盞が譲り受けた。また漠南書庫・横田実の収蔵印譜は、昭和51年東京国立博物館に寄贈された。

太田夢庵は『漢魏六朝官印考』『同譜録』（1967年）を刊行し、大谷瑩誠は『梅華堂印賞』（1942年）、また『中国古印図録』（1964年）などを刊行した。大西行禮は羅振玉が日本で刊行した『罄室所藏鈔印』（正統十二本）の古印724方を得て、現在は加藤達雄氏が収蔵しており、中村不折のコレクションは書道博物館に収蔵されている。

⑭わが国には一万近い中国古印が収蔵されており、また印譜も豊富に伝えられた。今後古印文字史学の研究がなされ、印学が大成されることが期待される。加藤慈雨楼の研究は、封泥に着目し、古印研究に一方向指し示したものといえよう。

⑮印章・篆刻史研究において、刻印と印譜は大切な資料となるが、市島春城や、藤山末吉（鳴堂）などが篆刻に造詣が深く、その価値を見出し、蒐集・保存に努めたことは、特筆しておきたい。単なる数寄者の嗜好ではない。

### 3. 和文英訳（抄訳）

「日本の印史—近世（江戸時代）以降—」の傍線箇所（①～⑮）に関して、和文英訳をする。固有名詞は専門性からローマ字表記を使用した。また逐語訳でなく大意による箇所がある。

- ① In the Edo period of Japan, the shogunate system was established, and economy and culture were spread through the land and developed uniquely in their own way.
- ② The engraving art in the early Edo period succeeded tradition of that in the Muromachi period.
- ③ The particular art began to be appreciated in Japan in early Edo when seals and signatures of antique calligraphic works and paintings were cataloged and published for the first time as the compilation of seal marks called *Inpu* 印譜.
- ④ The Ming Dynasty fell in 1644, and many Chinese refugees exiled to and naturalized in Japan. A new culture was imported from China to Japan through Nagasaki as the doorway; thus engraving was introduced and spread through the land by Obaku-shu monks.
- ⑤ Although slightly behind the movement in the early Edo period, engraving arts took root in Naniwa in style under the influence of *Houten Zattai* 方篆雑体, the decorative engraving style of xiaozhuan characters which was popular in China from the end of

the Ming period to the early Qing period.

- ⑥ During the Edo period, Nagasaki was the critical place as the only doorway to import Chinese culture; engraving artists in this period were related to Nagasaki to some extent.
- ⑦ In the middle of the Edo period, an individual had come to the front stage of history; Ko Fuyo 高芙蓉 (1722-1784) who was later praised as Insei 印聖, the master of sealing. He was a distinguished scholar, a skilled calligraphic and engraving artist as well as a painter of beautiful *Sansui* 山水, landscape paintings. Engraving especially was his area of expertise, and he denied the popular style called *Houten Zattai* from the end of the Ming period to the early Qing period; it was too flashy and cheap for his taste. He appreciated ancient seals in Qin and Han Dynasties and advocated to restore the classic style.
- ⑧ The essential factor in engraving art is the knowledge of *Tenbun* 篆文, a style of text written in *Tensho* 篆書 character.
- ⑨ The Edo period had also seen a spread of stamps among the public; they were used not only in the shogunate system among samurais in their official lives but also by the general public in their daily lives. Private seals and stamps were used on official and private documents, and they became indispensable in the business transaction as well. Use of stamps in Japan has its roots in the Edo period, which relates closely to the stamp-oriented system in our society today.
- ⑩ The classic style movement led by Ko Fuyo school was once the mainstream in the field of engraving during the latter part of the Edo period: Although it gradually went into decline in the Meiji period, the style had been succeeded to generations.
- ⑪ On May 15, 1868, the first year of the Meiji period, the government restored the seal system, which was described in "*Dajo Ruiten*" 『太政類典』, the written record of the Meiji Government administration, according to the "*Koushiki Rei*" 『公式令』, the Imperial ordinance that defined styles of the official document system. The Privy Seal of Japan, the Great Seal, along with seals for local governments or government agencies had been manufactured accordingly.
- ⑫ The two mainstreams in the field of engraving art during the period from Meiji to Taisho were the earlier-mentioned classic style movement for one, and the innovative style movement that created a novel designed seal, introducing a new style from China, for the other. Among the conservatives, there were Abei Rekido 安倍井櫛堂, Hagura Katei 羽倉可亭, Hamamura Zoroku (the fourth generation) 浜村蔵六(四世), Nakai Keisho 中井敬所, and Yamada Kanzan 山田寒山. Yamada Kanzan (1856-



1918) adhered to the tradition of Fuyo's classic style; his engraving works were modest and quiet. He was a person with great talent and extensive skills and quite good at in poem, calligraphy, painting, engraving, and pottery. His verse truly represented the echo of Han Shan poem; his calligraphy was full of grace and his bamboo paintings were quite famous. He later became the master of Hanshan Temple in Suzhou, China, dedicated himself to restore the temple as well as to forge a new bell for the temple. He had organized a company called Teibi Insha with Kawai Senro 河井荃廬, Hamamura Zouroku (the fifth generation) 浜村蔵六(五世), Nakamura Rantai (the first generation) 中村蘭台(初世), and Okamoto Chinsho 岡本椿所; he also issued "Inshobisei" 『印章備正』, a kind of encyclopedia for engraving art. Indeed, he was an extraordinary man who left quite many episodes in the circles of engraving art during Meiji and Taisho period.

- ⑬ Yamada Shohei 山田正平 (1899-1962) studied engraving in his youth under Kanzan Yamada and later was adopted to his family. He then studied painting and engraving abroad in China under Wu Changshuo 吳昌碩 and Xu Xingzhou 徐星州. He felt deep respect for his fellow townsman, Yaichi Aizu 会津八一; he was influenced by Ogawa Usen 小川芋銭; he valued subtleties of emotion, and his style in art was bold and open-minded.
- ⑭ Nearly ten thousand pieces of ancient Chinese seals were preserved in Japan, along with many *Inpu* (compilation of seal marks). An extensive study on ancient seals, characters, and history will hopefully lead to establishing a systematic genre in the study of engraving art.
- ⑮ Seals and *Inpu* are significantly valuable materials in the study of engraving. We want to draw attention to individuals like Ichishima Shunjo 市島春城 or Fujiyama Suekichi (Meido) 藤山末吉(鳴堂) who had profound knowledge in the field of engraving and found value in collecting and preserving relevant materials: dedication and contribution of these individuals to the study of engraving are too valuable to be treated like a collector's hobby.

#### 4. おわりに

「篆刻」という用語そのものも、Seal-engraving, Engravings, Incised character, Seal carving などと訳され、辞典によっていくらか相違している。このことから、篆刻に関する歴史などの文章の和文英訳は、細心の注意を要しよう<sup>4)</sup>。

どの訳を採用するかは訳者の専門知識によるものである。それだけに訳者のすぐれた力量や幅広い教養が問われることになる。

これから、篆刻に関する和文英訳は、英語を専門とする翻訳者と書道や篆刻の専門家とが協議し、適切な翻訳をしていくという共同作業の必要性があろう。その際における課題を列挙して纏めとしたい。

- ① 日本語と英語の「言い回し」の違いを理解する。
- ② 長い和文は短文に分けて英訳する。
- ③ テンス（時制）の違いを理解しておく。
- ④ 主語に対する動詞が適切か確認する。
- ⑤ ロジカル（文章に矛盾がない）か確認する。

### 【註】

- 1) 日本の篆刻史とは、日本における篆刻および印章の歴史である。

It is the history of the tenkoku and insho (seals) in Japan.

- 2) 神野雄二著『日本篆刻家の研究—山田寒山・正平を中心として—』（熊日出版、2017年3月）。
- 3) 印聖と称される高芙蓉は、中国と日本の篆刻史の篆刻を宗として一家を成した。

He established his own family, esteeming Chinese and Japanese historical tenkoku created by Ko Fuyo who is honored as insei (master of sealing).

- 4) 出頭 茂著 Monique Morley『英語で書！和英書道用語・用例集』（芸術新聞社、2018年2月）。

### 【参考文献】

- 1) 『英文日本大事典—カラーペディア／Japan: An Illustrated Encyclopedia』。  
日本の事柄が英語でわかる大事典。フルカラー写真・図版4,000点、12,000項目を収める。
- 2) 中田勇次郎（1905–1998）の著作で英訳された書道史に《Chinese Calligraphy (A History of the art of China) Hardcover - October 1, 1983 by Nakata Yujiro (Editor)》がある。
- 3) Ryokushu Kuiseko: “BRUSH WRITING-Calligraphy Techniques for Beginners-” /KODANSHA INTERNATIONAL, Tokyo.
- 4) Christopher J.Earnshaw: “SHO Japanese calligraphy-An In-depth Introduction to the Art of Writing Characters-” /Charles E.Turtle Company,Vermont&Tokyo.
- 5) William Willetts: “Chinese Calligraphy -Its History and Aesthetic Motivation-” /Oxford University Press,Oxford.

（じんの・ゆうじ 熊本大学大学院人文社会科学研究部教授）